

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1994年度には、飛鳥地域で水落遺跡・山田寺・川原寺・橘寺・山田道・甘樫丘東麓など7件の調査を実施した（調査一覧参照）。以下、このうち水落遺跡・山田寺・川原寺・甘樫丘東麓の調査概要を報告する。

1 水落遺跡の調査（第7次）

緩斜面を貼石で化粧した特異な正方形基壇建物SB200を中心とする水落遺跡は、1972年に発見され、1976年に国史跡に指定された。1981～86年の史跡整備にともなう2～6次調査の結果、SB200は地下に礎石を埋設した4間四方の総柱建物で、建物の中央には漆塗木箱をのせた台石を据え、これを中心に基壇内に敷設した木樋暗渠による導・排水施設をもつことが明らかになった。すなわち、東方から導水した水の一部をラッパ状銅管で給水し、利用した水は木箱を経て、再び木樋暗渠で西方に排水。余水は木箱を迂回した木樋暗渠で北方へ排水する。また、建物の中央からは、木樋とは別に小銅管が北へ延びる。地下の礎石は相互に列石で固定され、微動だにしない上部構造が想定される。SB200の北と南には、同様の基壇化粧をもつ長大な掘立柱建物（SB180・280）があり、全体が一つの掘込地業内に造成されている。以上のような外観・構造・機能の特徴および出土土器の年代観から、水落遺跡は中大兄皇子が斉明天皇6（660）年に建てた漏刻台と判明した。

水落遺跡は『日本書紀』に散見する飛鳥寺西方の槻木広場の西北を占める。飛鳥寺西方では小規模な調査が何度かなされ、飛鳥川に向けて下降する緩斜面に、階段状に石敷広場が展開すると推定できる。しかし、調査は断片的で全貌解明には至っていない。

一方、水落遺跡の北に接して石神遺跡がある。1981年から昨年度まで継続的に実施した石神遺跡の調査は総面積約12000㎡に達し、飛鳥寺の西北方において、長大な掘立柱建物と周囲の石敷・石組溝などで構成される遺構群が、7世紀を通じて展開することが明らかになった。遺構はA・B・C・Dの4時期に大別され、最も整備されたA—3期（斉明朝）には、長大な掘立柱建物で囲んだ長方形区画が東西に整然と並び、西区画では南3分の1の位置に正殿（四面庇付建物SB1900）を置く。南限は飛鳥寺寺域北限堀の北約11mの位置で平行する東西堀で水落遺跡と区画するが、水落遺跡から北に延びる木樋の通過点では堀がとぎれて通路となっていることなどから、少なくともA—3期には、両遺跡が密接な関連をもっていたことがわかる。

以上の成果を踏まえ、飛鳥幼稚園敷地の調査終了を期に、石神遺跡の調査を中断。本年度からは水落遺跡の史跡指定地周辺から南へ調査を進め、飛鳥寺西方地域全体のなかで水落・石神両遺跡の性格を検討することとなった。調査地は史跡指定地の東南にある南北に長い水田で、約1900㎡の敷地を3年度に分けて調査する予定である。本年度は敷地の北端に南北20m、東西30mの調査区を設定した。検出した遺構には、弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴住居、7世紀の掘立柱建物・石組溝・掘込地業・木樋暗渠・石敷、平安時代の井戸・土坑・小柱穴・素掘溝などがある。以下、7世紀代の遺構を中心に概述する。

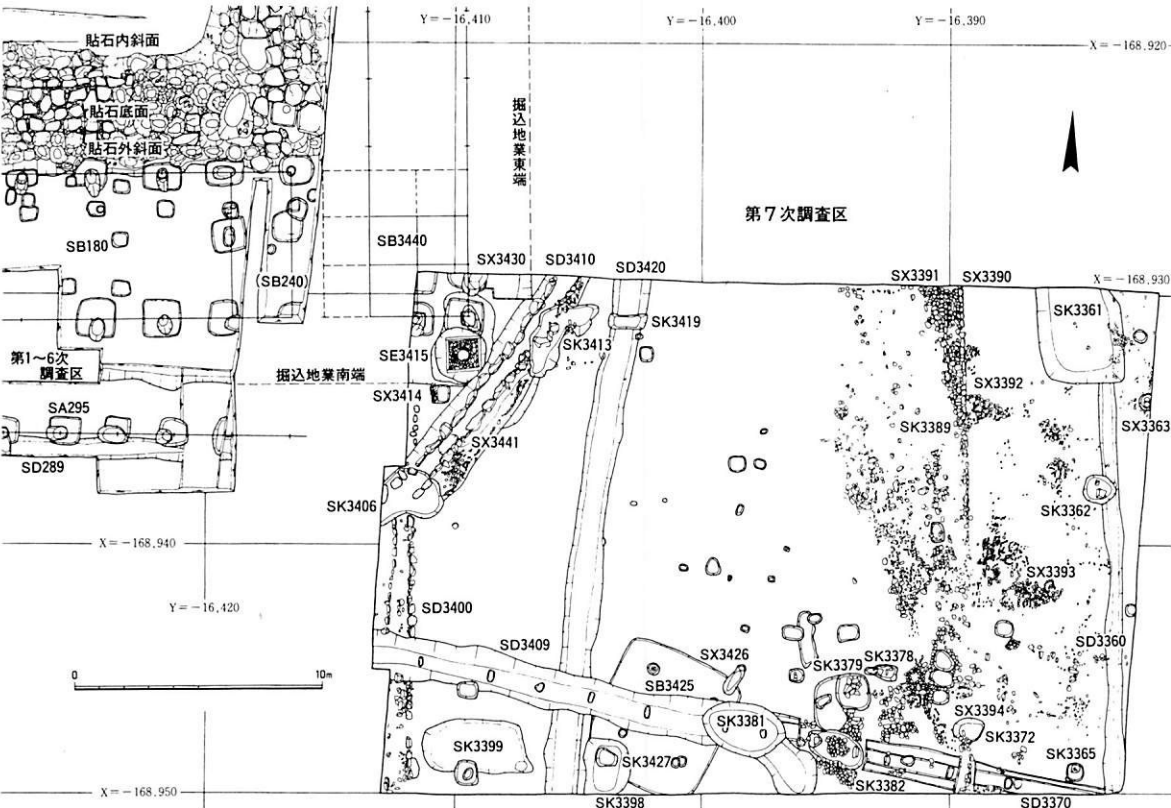
遺構 水落遺跡の遺構はSB200の時期（A期）と、それを埋め立てた後の時期（B期）とに大別できるが、本調査区では、SB200などを包括する掘込地業に先行する南北石組溝SD3400を検出した。幅0.6m、深さ0.25mで、人頭大の玉石を1～2段に積んで側石とする。底には灰色砂が堆積し、A期の遺構SD3409・SD3410・SK3406で壊されている。造営方位は北で東に約40°傾く。

A期の遺構を包括する掘込地業は、第4次調査で検出した南端の東延長部分と、SB200の南北中軸線から東22.8mの位置で東端SX3430とを確認した。古墳時代の土器を含む自然河川状の砂質土・砂礫土を深さ2.1m掘り込んで、底から砂礫土・砂質土・粘質土を互層に積み上げる。南端の掘り込みは、深さ1mほどで、小さな段のある二段掘りであったが、今回検出した東端は急傾斜で底に至る。掘込地業の東南隅はSD3410と重なっているが、南端もSB200の東西中軸から22.8m南にあるので、地業は正方形であった可能性が高い。地業土の最上層は掘り込み外縁の外に延びて、厚さ20cmの整地土となる。整地土上面は、西の掘立柱建物SB180の床面とほぼ同じ高さにある。

掘込地業の東南隅に建てられた掘立柱建物SB3440は、柱穴4個を検出した。完掘した東南隅の柱掘形は一辺1.5m、深さ2.0mで、褐色粘質土と灰色砂質土の互層で埋める。掘形底には方60cm、高さ50cmの花崗岩切石が据わり、黄色粘土で埋めた柱抜取穴が切石の中央上面まで及ぶ。柱間は東西1.9m、南北2.0m弱で、従前の調査でSB180の東に想定したSB240と南側柱筋は揃うが、南北方向の柱間が一致せず、別の建物配置を復元せざるを得ない。つまり、SB240の西妻と想定した柱穴3個は、SB180の東庇と見るべきで、その東に3間×3間あるいは2間×2間の総柱建物SB3440が復元できる。

斜行石組溝SD3410は、掘込地業の東南隅をかすめて、北で東に35～45°傾いて敷設される。調査区内で長さ12.5m分を検出し、さらに東北・西南へと延びる。幅2.2m、深さ0.6mの掘形溝内に、0.5～1.0m大の花崗岩を側石に使用して、内法幅0.6m、深さ0.5mの石組溝とする。北端側石の天端は、SB180の床面よりも高く、開渠であったことがわかる。SD3410は掘込地業と重複するが、それはA期内の施工時期差と判断できる。石神遺跡ではこの溝の延長は検出されていないので、礎石建物SB200の中心に向けて東から延びる2本の木樋暗渠、および掘立柱建物SB280の南側柱に沿った木樋暗渠の水源となる可能性が高い。

石敷SX3391は調査区東方にわずかに残る。東端に東に面を揃えて人頭大の石を並べた石列SX3390



水落遺跡第7次調査遺構配置図 (1:300)

があり、石敷中に約70cm離れて別の石列がある。SX3990は調査区北端から約11m南でとぎれ、SX3391も幅を狭めてなくなってしまふ。しかし、調査区南方の石敷SX3394は、SX3390の南延長より東に伸びないので、石敷SX3391とSX3394とは本来一体のもので、南北20m、東西7m以上にわたり石を敷き詰めていたと考えられる。石列SX3390は北で西へ1°40'余り傾くが、この方位は飛鳥寺西方一帯の石敷遺構の方位と近似する。

礫敷SX3392は拳大の石を乱雑に敷いており、虫食い状に点々と残る。石敷SX3391の東に、石列上面とはほぼ同じ高さで広がっていたらしい。地山の砂礫と区別しがたいが、一層だけで比較的面が揃うので、礫敷と考えた。南北20m以上、東西は石列の東4mまで確認できる。

調査区南端で検出した木樋暗渠SD3370は、東で南へ約11°傾いて敷設されている。長さ31m分を検出した。西半の木樋は抜き取られているが、幅1.4m、深さ0.7mの掘形溝の底に、長楕円形の花崗岩玉石が1.5~3.3mの間隔で並ぶ。木樋を据えた枕石である。枕石は木樋方向と直交して長軸を揃え、上面中央がわずかにU字形にくぼむものが多い。石の間隔から見て、木樋は枕石3個に対して1本の材を敷設したと考えられる。東半では外法幅0.4m、深さ0.3mの木樋が残っているが、すべて粘土化して細部構造は明らかではない。木樋直上には、底に一段低い石敷面を残す土坑SK3382のほか、平安時代の土器を含む大小の土坑状のくぼみがある。SK3382内の石敷はSX3394が広く覆っていた時に、木樋が腐って陥没したもので、その他のくぼみは石敷が抜き取られた後に陥没したものと思われる。

まとめ 以上、今回の調査では、水落遺跡の東南隅の状況が明らかになった。とくに、掘込地業の東端を確認したことにより、SB200を中心とする水落遺跡の建物群は、全体が正方形のプランで設計されたことが明らかになった。その東南隅で検出したSB3440は、全体の設計計画から2間×2間の総柱建物の可能性が想定できる。また、飛鳥川から取水した水は斜行石組溝SD3410によって、水落遺跡の東に集められ、そこから木樋暗渠で西へ導水した可能性が考えられる。これらの遺構に先行する南北石組溝SD3400の造営方位は、石神遺跡A—1期にはじまる遺構群と等しい。調査当初、本調査区では、従来、水落遺跡の南限堀と考えていたSA295が東に延びると予想していた。しかし、その延長はなく、SA295はSD3400とともに石神遺跡A—1期に属する遺構の可能性が高い。

2 山田寺の調査（第9次）

1976年以来、8次にわたって伽藍中枢部や南門・大垣など、山田寺跡の調査を実施してきた。その成果を受け、特別史跡の追加指定や土地公有化事業が進められ、史跡整備の必要性が高まった。今回の調査は、整備事業の実施設計にあたり、未解明であった寺域東南隅の状況を知るために実施した。寺域東辺については、第4次（1982年）と第8次（1990年）調査で、東面大垣とそれにとまなう石組溝などを、南辺については、第7次（1989年）調査で南門とそれにとりつく南面大垣とその前を流れる東西溝などを確認した。この成果から、寺域東南隅の位置は予想できるが、東に急に高くなる現地形が、本来のものなのか、後の堆積の結果なのか速断できない。調査は寺域東南隅の位置・地形および大垣構造・変遷の解明を目的とした。調査地周辺は、西へ雛壇状に下がる水田で、寺域東南隅推定地はほぼ真西に流れる小川で分断されている。東南隅を直接検出するのは困難なので、やや北にずらして東西7m、南北10mの範囲で遺構を検出した。

遺構 検出した遺構には、東面大垣SA500、その東を流れる2条の南北溝SD530・SD531、および瓦列をとまなう土塁状遺構SX535がある。

東面大垣SA500の規模は、第4次調査で判明している。今回の調査では、上層の土塁状遺構を保存するために、1カ所だけ掘り下げて柱穴を確認した。東西1.4m、南北1.3m、深さ2.1mの柱掘形の底面から約70cmほど浮いた状態で、礎板が据わっていた。礎板は長さ93.5cm、幅22.5cm、厚さ13cmのヒノ

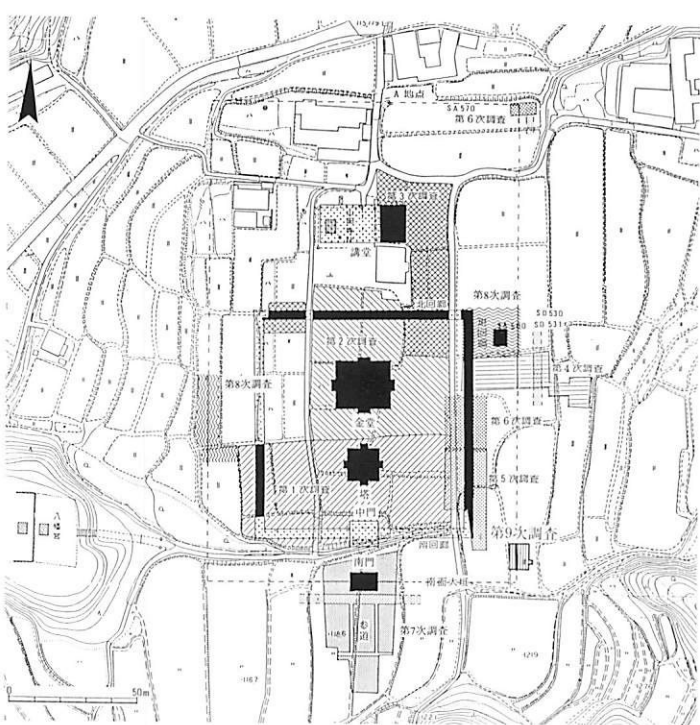
キ材で、ほぼ中央にある柄穴(直径7.5cm)を中心に径20cmの柱の圧痕つく。礎板が掘形底面から浮いているのは、掘立柱塼が創建当初のものではなく、ある時期に改修されたことを示す。SA500は、花崗岩の地山岩盤を削り残した高まりの上に、砂質土と粘質土を積み上げた幅約2.0mの基壇をとまう。基壇の東には、瓦や垂木などの建築部材が散乱し、東面大垣は瓦を葺いた一本柱塼で、東側に倒壊したことが判明した。

東面大垣の東で確認した南北溝のうち、西にあるSD530は幅1.2m以上、深さ0.4mの素掘溝で、大垣心から東3.65mに西肩がある。東の南北溝SD531は、SD530の東半に重複して掘られた幅0.9m、深さ0.3mの素掘溝である。第4次調査で検出したSD531の北延長部では石組をとまなったが、本調査区では石の抜き取り痕跡すらなかった。別の溝の可能性も残るが、SD530との先後関係も共通するので、上記のように理解しておく。

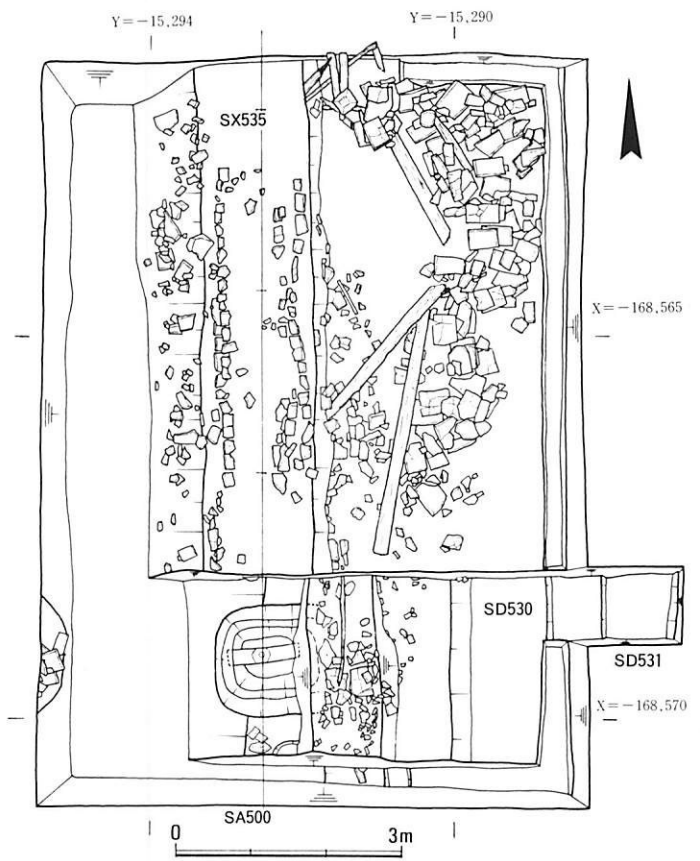
瓦列をとまう土塁状遺構SX535は、東面大垣SA500の倒壊後、倒壊した建築部材などを埋め込んで整地した上に、大垣基壇も包み込んで盛り上げたもので、基底幅3m、上端幅1.2m、高さ70cmの規模をもつ。盛土は瓦を交えながら粘質土・砂質土を互層に積み、最上部には1.2mの間隔で南北に走る瓦列が残る。整地土中から延喜通宝が出土した。

遺物 出土遺物には、瓦、土器、金属製品、建築部材、石製品、銭貨などがある。

東面大垣倒壊にとまう瓦群の構成から、一本柱塼には当初、石川麻呂～天武朝の造営期に作った凸面斜格子叩き目の粘土板桶巻き平瓦と玉縁式丸瓦とを葺き、奈良時代以降の改作や修理時に、凸面縦位縄叩き目の一枚作り平瓦と行基葺式丸瓦を補足したことがわかる。さらに、布



山田寺第9次調査位置図 (1:3,000)



山田寺第9次調査遺構図 (1:100)

目が粗い凸面縦位縄叩き目の平瓦と玉縁式丸瓦が少数あり、10世紀頃にも若干の瓦を補足したらしい。落下瓦には軒平瓦もあるので、この堀には軒瓦も葺いたと考えられる。平瓦凹面に残る葺足痕跡と後述の垂木の長さから、東面大垣SA500は、軒丸瓦・軒平瓦各1枚に対して、丸瓦2本と平瓦3枚の割合で葺いた瓦屋根に復元できる。

出土した建築部材には垂木・斗・棟木がある。垂木は北端で2本出土し、現存径約8cm、長さは66cmと118cmである。端部を柄に作り、柄部分に円い穴をあける。短い材は柄の足元を斜めに切っており、垂木の拌み部分に該当する。斗の平面は約30cmの方形で、東回廊出土の巻斗の寸法にほぼ等しい。棟木は断面円形で、上面にほぼ一定方向にはつった痕跡がある。垂木を納めるための簡略な仕事と思われるが、はつりは前後が揃わず、前記の垂木とセットとするには疑問を残す。

まとめ 今回の調査で確認した東面大垣SA500の柱穴は、従前の調査成果にもとづいて、寺域東南隅から北3間目の柱と推定できる。その基盤面は回廊東南隅よりも約1m低い。これは第4次調査で確認したように、創建時に回廊から南北溝SD530にむけ、東に下降する形で整地したことを示す。しかし、東面大垣は低い基壇上に建つので、回廊と大垣との間の雨水などは、東面大垣の西裾に沿って南へ排水したことになる。大垣の東にある南北溝SD530・SD531の主な役目は、東の斜面上方からの水を境内地に入れないことにあるのだろう。

東面大垣が瓦葺きで、瓦の差し替えを何度か受けたこと。その倒壊年代が10世紀前半頃であることなどが、今回の調査で判明した。大垣倒壊後、その廃材を埋め込むように整地した上に、大垣と同じ位置に土塁状の高まりを積み上げるが、それは再び東からの崩壊土で埋没する。この崩壊土は、東回廊を倒壊させたものと同じ可能性があり、そうであるならば、土塁状の高まりは構築後まもない10世紀末頃に、寺域東辺の施設とともに廃絶したことになる。

3 川原寺の調査 (1993-2次調査)

本調査は、史跡川原寺跡の指定地南を通る県道多武峰見瀬線の歩道改修と電柱撤去などの周辺整備工事による現状変更にとまなう事前調査である。調査地点・調査面積・工事内容は以下の通りである。
I区；南門南方(6.7㎡)、電灯線埋設工事。II区；南門・南面大垣(49.4㎡)、歩道改修工事。

III区；寺城南西部(16.8㎡)、明日香村公共下水道。IV区；南面大垣(10㎡)、電灯線埋設工事。これらの調査で、川原寺南門と南面大垣について、新たな知見が得られた。

遺構 II-1区で川原寺南門の南西部と石敷参道・南面大垣を検出した。南門は1925年に内務省が、1957～58年に奈良国立文化財研究所が調査しており、本調査区も一部が旧調査区と重複する。

南門の基壇は、ほぼ平坦にした花崗岩岩盤の上に、厚さ40cmほどの灰青色砂質土層で整地した後、築成している。掘込地業は岩盤を30cmほど掘り込むが、基壇全体にはおよぼず、棟通りに幅2.6m以上にわたって行く。基壇南辺の掘込地業は部分的で、中央間付近では整地土の上に直接、黄褐色の基壇土を積んでいる。基壇の南辺と西辺は、人頭大あるいはそれよりもやや大きめの玉石列で化粧する。玉石の並べ方はやや粗雑で、西辺玉石列中には大型矩形磚の断片も混じっていた。西辺玉石列は、西南隅から北へ約3m延びて西へ折れ曲がる。

南門基壇上では、礎石抜き取り穴3個と瓦敷を検出した。礎石抜き取り穴は南側柱列の西側2個と西妻柱の礎石とに該当する。抜き取り穴の底面には、花崗岩礎石・根石の表面が付着しており、その下に礎石据え付け掘形の埋土を認めた。瓦敷は基壇南辺近く、とくに南側柱の中央間付近でみとめられ、基壇南辺の玉石列とよくなじんでいる。瓦敷中には平安時代後期の軒丸瓦なども含む。

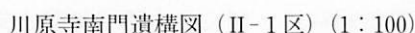
南門基壇南の雨落溝は、調査区東端では幅約60cm、深さ25cmで、西端では浅く細くなって途切れる。雨落溝の北肩は、基壇南辺の玉石列が側石を兼ね、南肩は素掘りだが、石敷参道を横切る部分では南

南門の南には石敷参道がとりつく。今回は南門南の雨落溝の南側石を兼ねる北縁石と、その南の石敷1石分を検出したにとどまる。

このほかⅡ-2・3区、Ⅳ区においても、南面大垣の一部を確認した。Ⅱ-2・3区では、築地基礎南縁と、その南にある東西石組溝を検出した。Ⅱ-3区では、築地南縁に沿って平瓦片を10枚程並べた瓦列がある。東西石組溝は、側石の内法で幅50~60cm、深さ30cmをはかり、底石はない。築地の掘込地業の南縁は、石組溝を越えてさらに南にある。Ⅳ区では築地塀本体は完全に破壊されていたが、南面大垣の北雨落溝と思われる東西石組溝を検出した。両側を花崗岩川原石で護岸しており、内法幅は約1.5mある。

57

II-1区で検出した南面大垣の築地葛石列や、II-3区で検出した瓦列の方向は、国土方眼とほぼ一致する。南門とのとりつき位置では、葛石列に接して添柱と思われる柱穴があり、その北1.2mにも対になる柱穴がある。



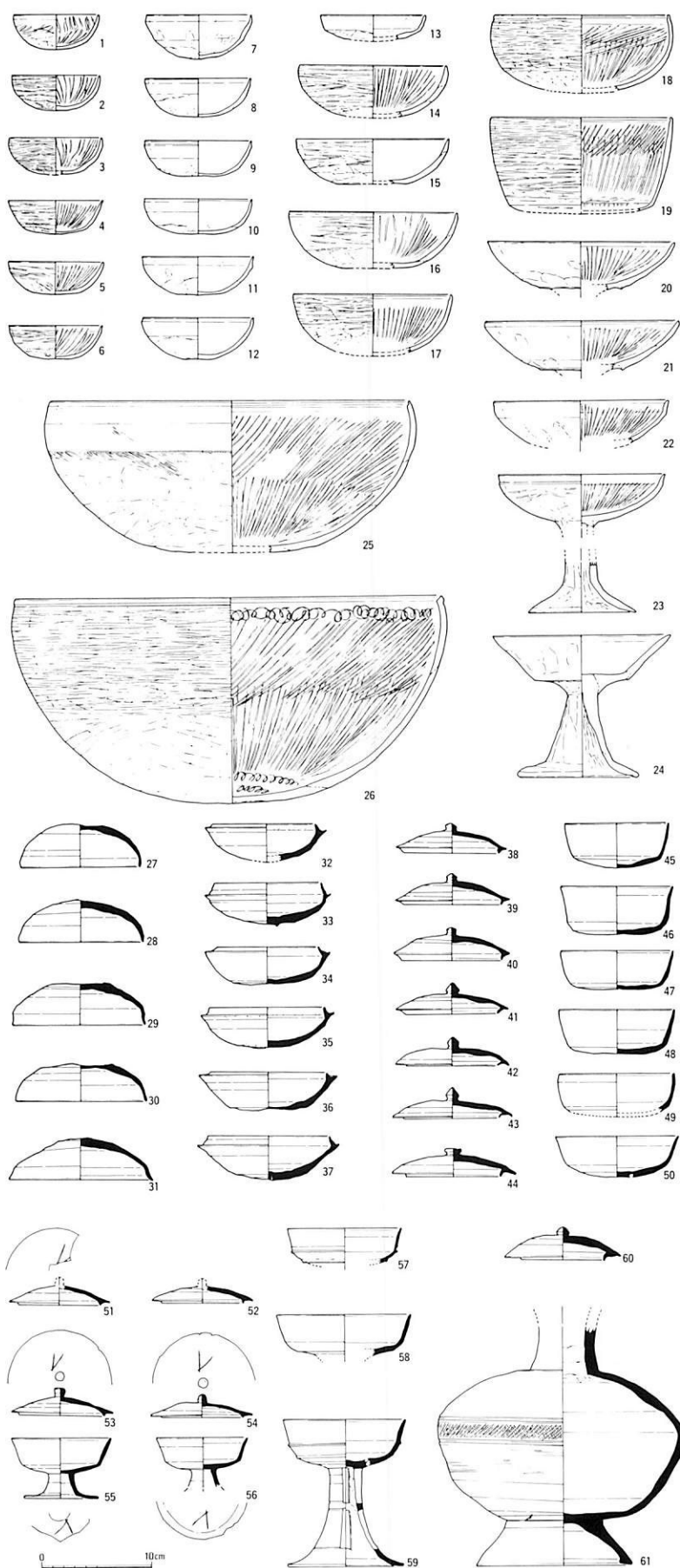
築地基底幅は2.4m前後に復元できる。ここで南門が伽藍中軸線に対して振れているとすれば、南門の西妻柱は築地心より南にずれることになり、むしろ南門建物自体は伽藍方位に正しくのっていると思われるが、南面大垣との関係を理解しやすい。

本調査は、飛鳥国営公園整備事業の一環である駐車場建設にともなう事前調査として実施した。調査地は、甘樫丘の東南麓に刻まれた小支谷の一つで、その谷の出口にあたる。調査地からの視界は東北に開け、約500m先に飛鳥寺を望むことができる。

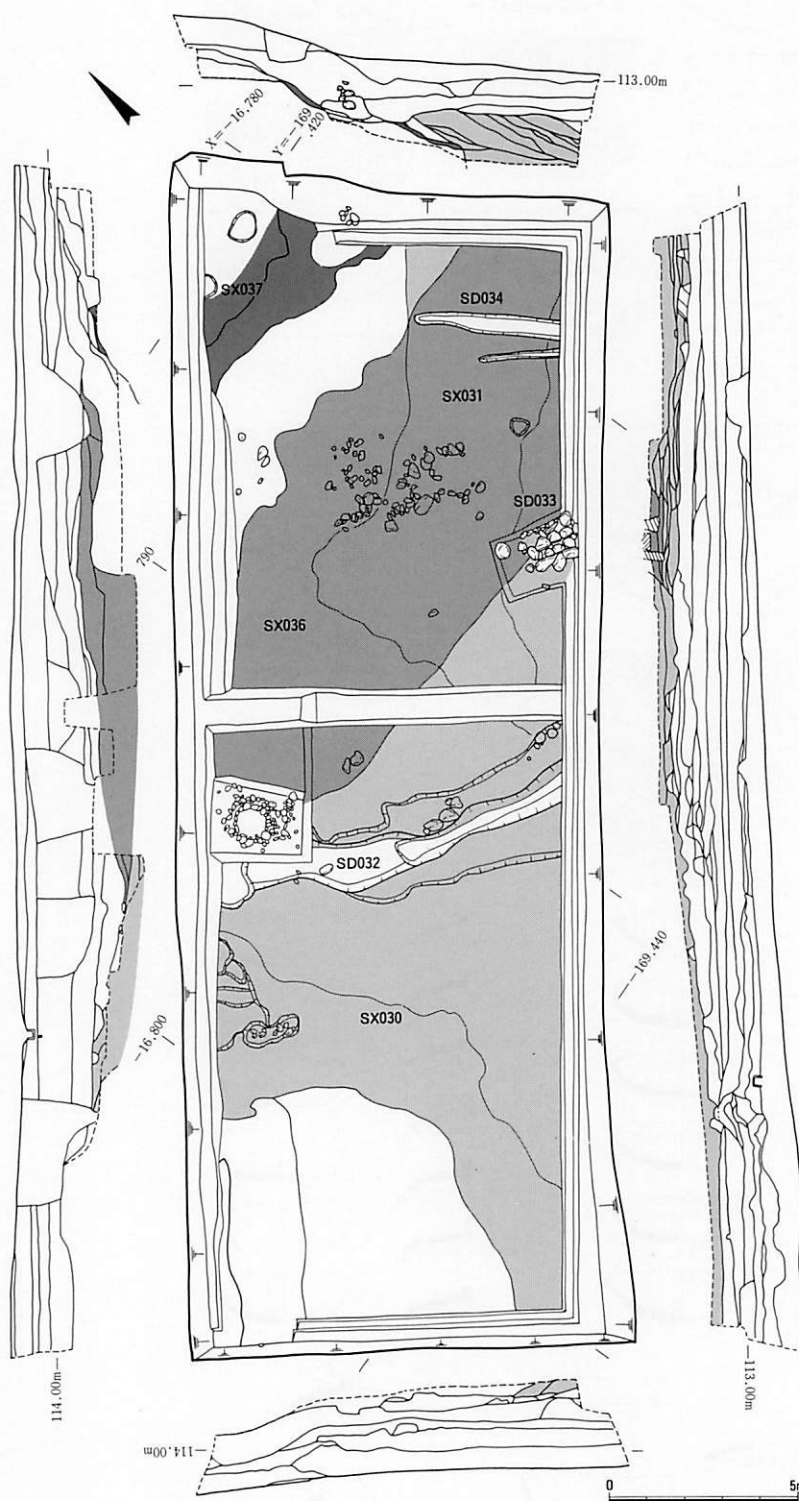
遺構および遺物包含層 本調査で検出した遺物包含層および遺構は、切り土埋立て整地層2面、土石流による埋没層1面、焼土層1面、石組溝1条、素掘溝、土坑などである。これらは、平安～鎌倉時代、7世紀後葉、7世紀中葉の3時期に大別できる。以下、7世紀代の遺構の概要を記す。

土石流SX036は、調査区西辺中央から東隅に向けて、幅約7.5mで東流する。埋土はグライ化した青灰粘土を主体とし、多量の粗粒砂を含む。層中には石や多量の土器・木材などを含む。

上層の切り土埋立て整地層SX031は、調査区北東部で認められた。土石流SX036による谷の埋没後、その下流部分を、SX030と同様に地山の岩盤を切り崩して整地している。SX031の上面では、調査区北半で東西溝SD034を検出した。埋土から飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器が多量に出土した。



焼土層SX037出土土器実測図 土師器（1～26）、須恵器（27～61）、（1：6）



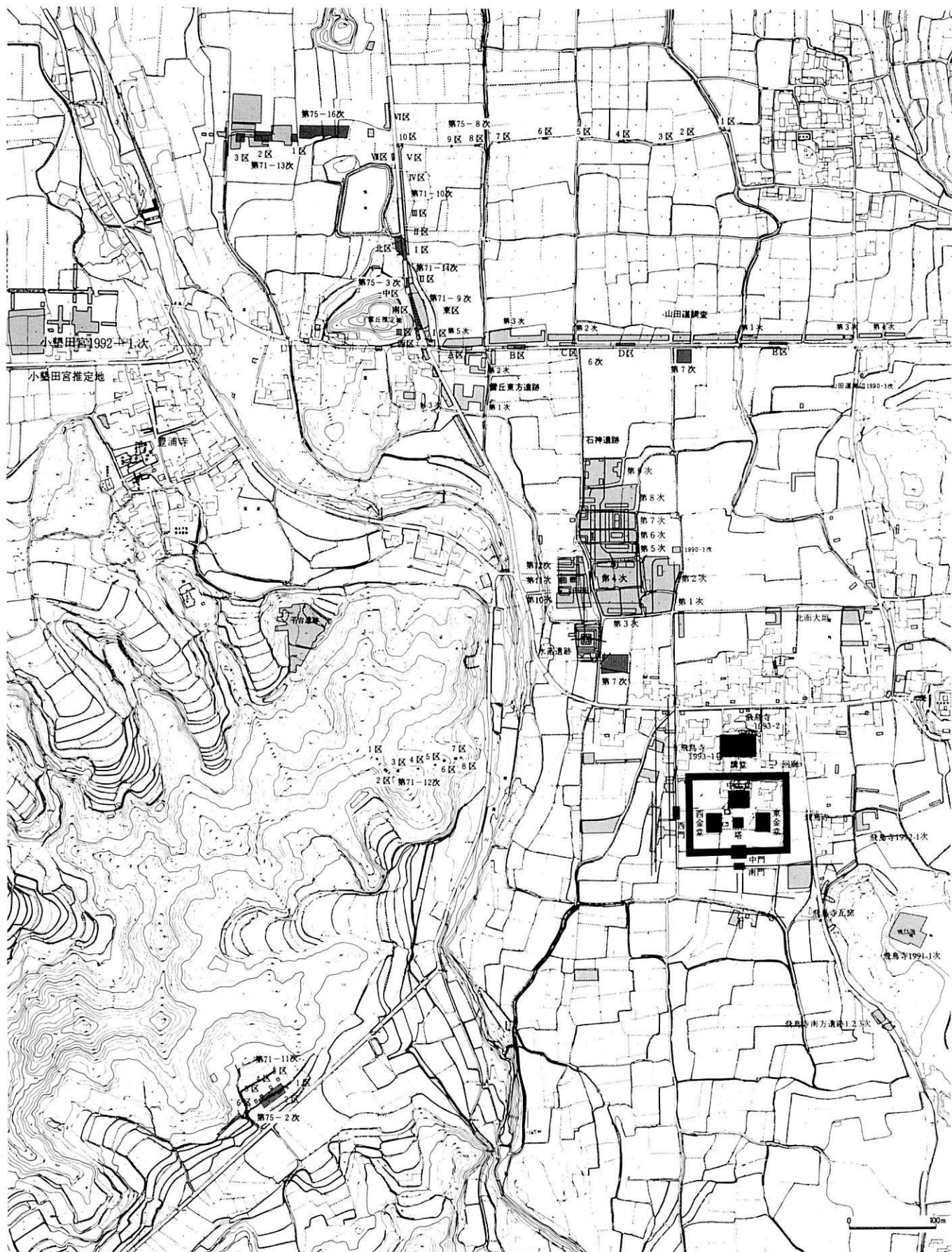
第75-2次調査遺構図 (1:200)

SX037から出土した土器は、きわめて良好な一括資料で、山田寺南門前面の整地土下で検出したSD619および整地土出土の土器群に近く、飛鳥Iの新しい段階に相当する。『日本書紀』には、蘇我大臣蝦夷・入鹿が甘樫丘に家・城柵・兵庫を作ったこと、皇極4(645)年の乙巳の変(大化改新)にこれが焼亡したことが見える。焼土層SX037から出土した土器の年代観は、この『日本書紀』の記述とよく合致する。

(上原真人)

7世紀中葉の遺構には、調査区北端の岩盤上面で、谷の斜面全体を覆うように広がる焼土層SX037がある。斜面では、焼土・焼けた壁土・炭化木材・土器片が、黄褐色の岩盤風化土とともに包含層を形成し、その厚さは2~20cmにおよぶ。この堆積は現地地表下約4mの谷底まで達するが、谷底部では土壌がグライ化して、炭化木材に加えて多量の草木灰や土器片を含む青灰色砂質土となる。斜面の焼土層と青灰色砂質土層で出土した土器片が接合するので、これらは一連の堆積と考えられる。まとめ 今回の調査で、甘樫丘東南麓の土地利用の状況が明らかになった。7世紀後葉から藤原宮期には、2度にわたり丘を切り崩して、大規模に谷を埋立てている。これによって旧地形が改変され、本来西から東に開く谷筋が、東南方向に開口するようになったと推定される。また、多量の遺物から、調査区西方の平坦地、もしくは南・北方の尾根付近に何らかの施設があったものと推定される。

7世紀中葉の焼土層SX037は、調査区北方の尾根上に存在した施設の焼失にともなうものと推定できる。焼土層



飛鳥寺・水落・雷北方・甘樫東麓遺跡調査位置図 (1:6,000)

藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1994年度には、藤原宮跡内で11件、京跡内で11件の調査を実施した（調査一覧参照）。宮跡内の調査はすべて事前調査である。東方官衙地区では、藤原宮遷都1300年祭のための道路拡張と住宅建替にともなう事前調査を行った。西方官衙地区では、南方で四分町の団地造成にともなう大規模な事前調査のほか、住宅建替や道路拡張にともなう小規模な事前調査を行い、北方では宅地造成や歩道拡張にともなう小規模な事前調査を行った。京跡内では、本薬師寺の計画調査を継続して実施した。このほかに市道飛驒～木之本線建設にともなう大規模な事前調査を行ったが、ほかはいずれも道路建設・住宅建設などにともなう小規模な事前調査である。

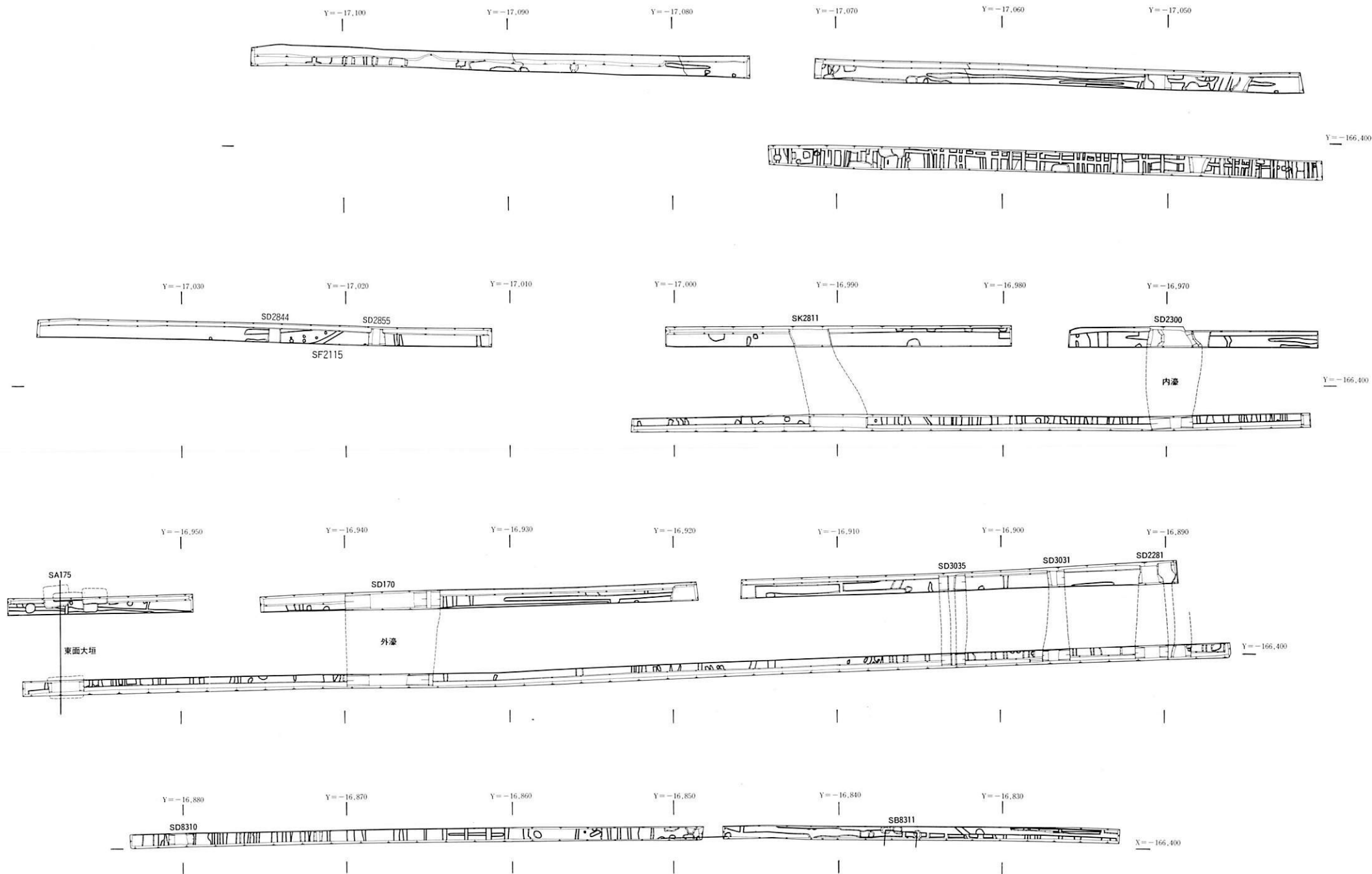
1 藤原宮跡の調査

東方官衙地区の調査（第75-9、13次）

市道拡張に伴う事前調査であり、調査地は東方官衙地区・東二坊大路・左京四条三坊東北坪にまたがる東西190mあまりの細長いものになった。東二坊大路に関連する遺構の検出が期待された。

遺構 検出した遺構は、藤原宮東面外濠、東面大垣、東面内濠、東二坊大路とその側溝、先行条坊側溝などである。まずSD170が、藤原宮の東面外濠である。出土した木製品遺については後述する。SA175は東面大垣でSD170の心から西へ20mの位置にある。SD2300は内濠でSA175の西へ12.5mにある。濠内からは偏行唐草文軒平瓦や軒丸瓦ほか木簡1点と削り屑2点などが出土した。東二条大路関連の遺構としては、東から順にSD8310、2281、3031、3035の4本の溝を検出した。SD8310は、幅1.5m、深さ0.3mで、溝内には炭化物を含む灰色砂が堆積し、焼けコゲのある木屑や土器片が出土した。その位置と砂の堆積、松明の一部とみられる焼けた木屑の出土などによって、東側溝であることはほぼ明らかである。問題となるのは西側溝であり、SD2281はSD8310の西約10.5mで検出した。これは第27次調査で東二坊大路西側溝とされたが、第32次調査で平安初期の土器が含まれることが明らかになり藤原京廃絶以後の溝とされた。この溝は東西2本分の堆積があり、東から西へと流れが移っており、東肩には護岸用の玉石もある。これに対してSD3031は、SD2281のさらに西6.1mの位置にあり、第32次調査ではこれを東二坊大路西側溝とした。ところがさらにこの西6mの位置にSD3035があり、第32次調査では堆積した土器が「飛鳥Ⅲ」を主体とすることから宮造営前にあてたのであるが、その後の検討によって「飛鳥Ⅳ」的な土器を含むことが判明し、SD3031と一連の溝である可能性がでてきた。したがって東二坊大路西側溝としては、SD3031とSD3035が候補となりうるのである。SD3031を西側溝とすると、東西側溝間の距離16.6mとなり、これまでの成果とあまり隔たらないが、SD3035を西側溝とすると、東西側溝間距離は22.6mとなり、これまで検出された大路路面幅よりかなり大きく、むしろ平城京での大路推定値の7丈（21m）に近くなる。ここではSD8310とSD3031を東西側溝に当て、SD3035に関しては今後の課題としておきたい。建築遺構は、左京四条三坊西北坪でSB8311とSA8312を検出したが、ともに検出範囲が狭く十分に性格を把握するまでには至らなかった。宮内ではSA8313を検出している。これは柱間が2.1m等間であり、第29次調査の東西堀SA2810と平行しており、一体の建物となる可能性もある。また、先行条坊の側溝としては、東二坊坊間路SF2115の西側溝SD2844と東側溝SD2845を検出した。ともに顕著な遺物はなかったが、SF2115の路面幅は約6.5mと確定した。

遺物 遺物には土器、瓦礫および木製品がある。土器は藤原宮期の須恵器・土師器と、下層の弥生式土器・土師器などがあるが量的には少ない。瓦礫は内濠SD2300に集中しており、軒瓦はすべてここか



第76次調査遺構図 (1:300)

ら見つかった。軒丸瓦には6279B、6278Fの2型式2点があり、軒平瓦には6643C、6646D、6647A、6647Bの3型式2種計7点がある。木製品は、棒状品と木簡、曲物などが出土している。外濠SD170で多量に出土した棒状品は、長さ17~18cmから22~23cm、幅0.5~0.6cmほどのものが多い。濠の堆積は暗灰土、灰色粘土、灰色砂土、暗灰粘土に分かれ、灰色砂土、灰色粘土から1cm²あたり2,000個を超す寄生虫卵を検出した。その鑑定結果については概報で詳述している。この寄生虫卵の出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強く、したがってこれら棒状品は糞便にともなう簀木（糞へら）と思われる。木簡は、外濠SD170と内濠SD175から見つかった。主要な釈文を掲げる。

御取鮑□石

039 (197)×29×5

・頓首天下達……宇下急

・急可罷处在故日中之……□被賜菓

011 (125+65)×27×4

この2点は外濠SD170の木簡で、前者は付札である。

縣主里 □直若万呂

031 115×21×6

内濠出土。付札である。

このほかには、曲物の底板などが数点ある程度である。

このほかの調査成果として、藤原宮の東西規模について新たな知見を得た。これまで藤原宮の東西大垣間の距離については926.6m程度に復元していた。しかし、以前の測量の誤りが発見されたので改めて計算を行った。

第34次調査で検出した宮西南隅の心と第66-11次調査で検出した宮西面大垣の心から、西南大垣の振れを求めると、0°30'57"北で西に振れをもつ。藤原宮の大垣が正方形と仮定して、東西の振れを求め、今回調査の東面大垣心と、第66-11次調査の西面大垣心の距離を座標上で求めると、927m28cmとなる。これは『藤原宮』（飛鳥資料館図録13）の値より1m70cmほど大きい数字である。

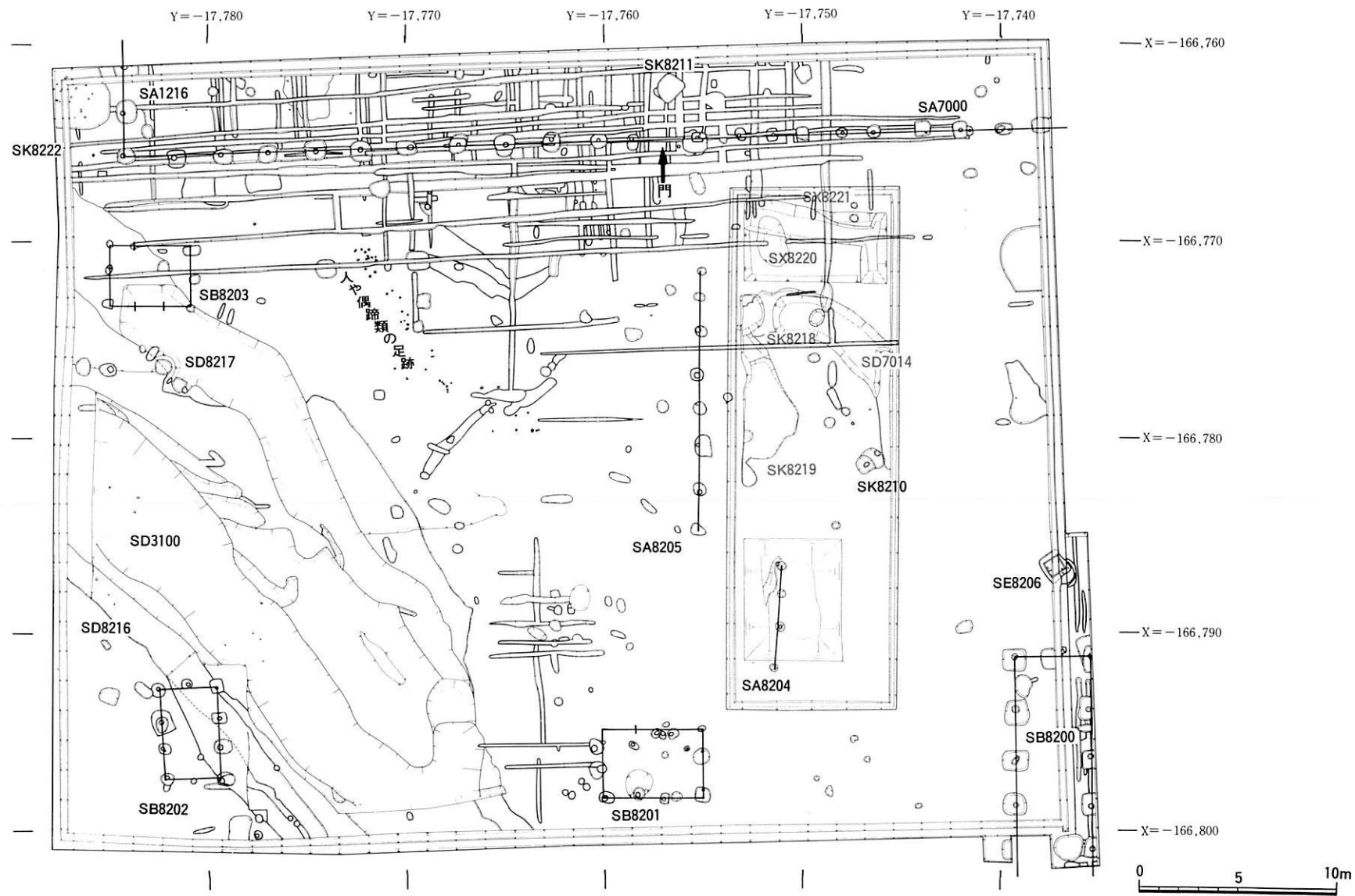
このほか高殿町で住宅改築にともなう小規模な第75-9次調査を行ったが、藤原宮の遺構は検出できず、中世後期の池状施設の一部を検出したのみである。

西方官衙地区の調査（第75-1・5・6・7・12・14・18次、第76・77次）

最初に宮内西南部の四分町周辺で行った第75-1・5・6・18次と第76・77次調査を述べ、ついで西北部で行われた第75-7・12・14・15次調査について述べる。これまでの調査同様に藤原宮期の遺構密度は希薄で、建物の方位などから推定して、藤原宮期と思われる遺構は、建物6棟や区画堀などにとどまる。

第76次調査は、四分町において予定している住宅改理事業用地の造成に伴う事前調査である。調査区は、宮西面南門の北東部すなわち宮内先行条坊の五条西二坊東南坪に位置する。第6、8、9、63-8次調査で、東南坪の北半に掘立柱堀で囲まれた区画があることが知られているが、その南西堀を検出し、一部に門が想定される個所も発見された。この区画は、先行条坊遺構に規制された配置をとるので藤原宮期直前の建設と見られているが、藤原宮期まで存続していたかどうかは、なお検討を要する。さらに、区画外で掘立柱建物を4棟検出している。

遺構 藤原宮期とその直前の遺構としては、掘立柱建物4棟（SB8200~8203）、掘立柱堀4条（SA1216・7000・8204・8205）がある。SB8200は、桁行5間以上（柱間約2.1m）、梁間2間（柱間約2.4m）の南北棟で、柱掘形は一辺1m強と大きい。このほかの3棟は小規模で、SB8201は、桁行3間梁間2間の東西棟で、柱間は1.5~1.8mである。SB8202は、桁行3間梁間2間の南北棟で、柱間は1.5mで、北で若干西に振れるのが特徴である。SB8203は、東西2間（約4m）南北2間（約3m）で柱間が不揃いである。つぎに、区画堀としては、第63-8次調査でその東半がみつかったSA7000の西半



藤原宮第75-18次調査遺構図 (1:300)

が21間分検出できた。さらにこれが西北隅で北に曲がり第6次調査でみつかったSA1216につながることが判明した。SA7000は、柱間が1.5～2.4mで西寄りの掘形平面は、東のものに比べて大きくかつ深い。SA1216は、2間分を検出し、柱間は2.1mである。SA8204は、柱間が1.5～2.1mの南北塀（3間）で、掘形は浅く北で東に振れる特徴をもつ。SA8205は、柱間が1.5～2.4mの南北塀（7間）である。

本調査によって判明した区画の規模を整理すると、東西幅が87.5～88m、南北幅が58.2～58.8mである。南辺の塀SA7000は東西41間ある。西から12間目が幅3.8mと広く、12間目の柱がSA8205の延長上にあることから、ここが門だった可能性がある。北辺の塀SA1215は41か42間、西辺の塀SA1216は推定25間である。区画の東西幅87.5～88mは、藤原京の地割りの基準値である750大尺の1/3の250大尺である。区画の南北幅58.2～58.8mは、完数尺が得られないが、先行条坊五条大路北側溝と五条々間路南側溝の間の敷地のほぼ1/2にあたる。その後この区画内の建物配置が大きく改変されるとか、区画塀を切る新しい建物が建てられることはないので、この区画の年代の下限の決定を困難にしている。

第77次調査は、やはり四分町の住宅改廃事業の造成にともなう事前調査である。調査区は、先行条坊の六条西二坊北東坪の西北隅に位置し、第7・69次調査で検出されていた先行条坊西二坊々間路の東側溝SD3318の北部分を検出した。幅約50cm、検出面からの深さ20cmで、位置は第51・54-9次調査で検出されたものと一致している。ほかには藤原宮期と比定できる遺構はなかった。

第75-6次調査は、第77次と同じ坪の南方で行われた小規模な事前調査である。主な遺構は、小規模な掘立柱建物SB8340と東西溝SD8335である。SB8340は、桁行3間梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.8m前後でばらつきがあり、径約10cmほどの柱痕跡が残る。藤原宮期直前から藤原宮期にかけての遺構と考えられる。東西溝SD8335は、幅約1m、深さ約0.1mの浅い溝で、7世紀後半の土器が少量出土した。

第75-18次調査は、第77-6次調査地のやや東で行われた小規模な事前調査である。主な遺構には、掘立柱建物SB8390と、井戸SE8391、8392がある。SB8390は、桁行5間以上梁行1間の南北棟建物で、桁行柱間は約1.8m、梁行柱間は約3.3mである。柱抜取穴から出土した高杯や方位から宮期かその直前期のものと考えられるが、北でやや西に振れる特徴をもつ。SE8391は、掘形直径約1mで検出面からの深さ50cmの井戸である。底に小石を敷き、その上に曲物を据えていた。埋土が類似することからSB8390と同時に廃棄されたことが分かる。両者の間には第75-6次で検出された東西溝SD8335が通っており、これらが一体の施設であった可能性は高い。SE8392も、掘形直径約3mで検出面からの深さ約1.8mの井戸であるが、「飛鳥IV」の須恵器が出土しており、一体の施設であると思われる。

このほかには、第75-1次調査では、西面外濠SD260が10世紀代には埋められ水田になっていたことが確認された。第75-5次調査では、藤原宮期の遺構と確定できるものは検出できなかった。

藤原宮期以前の成果としては、第76次調査で飛鳥・藤原地域で最古の部類に属する蒸籠組井戸SE8206が見つかった。また、弥生時代後期の方形周溝墓SX8220・8221は、第69-12・71-1次調査などで検出された方形周溝墓群のなかで最も集落に近接している。第75-6次調査で検出された井戸SE8332からは、おもに弥生中期前半の土器に伴って木製の鍬・斧柄・腰掛・容器、用途不明の鹿角製品、さらにクマネズミ属頭骨・穿孔されたイノシシの下顎骨などが出土した。寄生虫卵・植物遺体分析の結果、この井戸はなんらかの寄生虫卵汚染か動物糞便の堆積物があったこと、周囲の環境はオナモミ属やヨモギ属が繁茂したやや乾燥した状態から、水田が近接して広く分布するよう変化したこと、森林はコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林であったがしだいに減少したこと、トネリコなどの湿地林が近くにあったことなどが推定された。

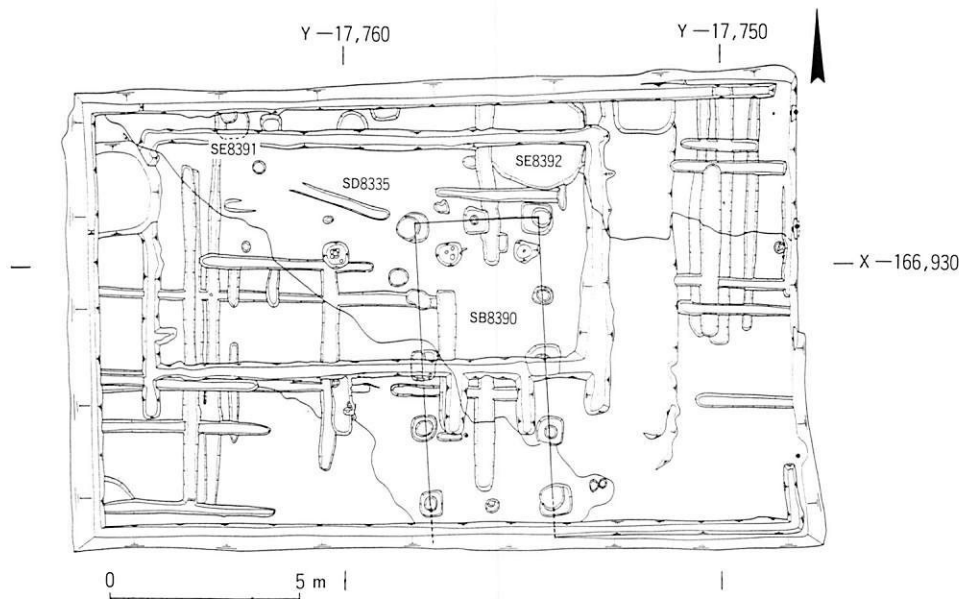
つぎに、宮内の西北部で行われた第75-7・12・14次調査について述べる。

第75-12次調査では、藤原宮期と推定される掘立柱南北塼SA8270を検出した。柱間は2～2.1m（7小尺）で6間分を検出しが、方位は北で東に振れている。

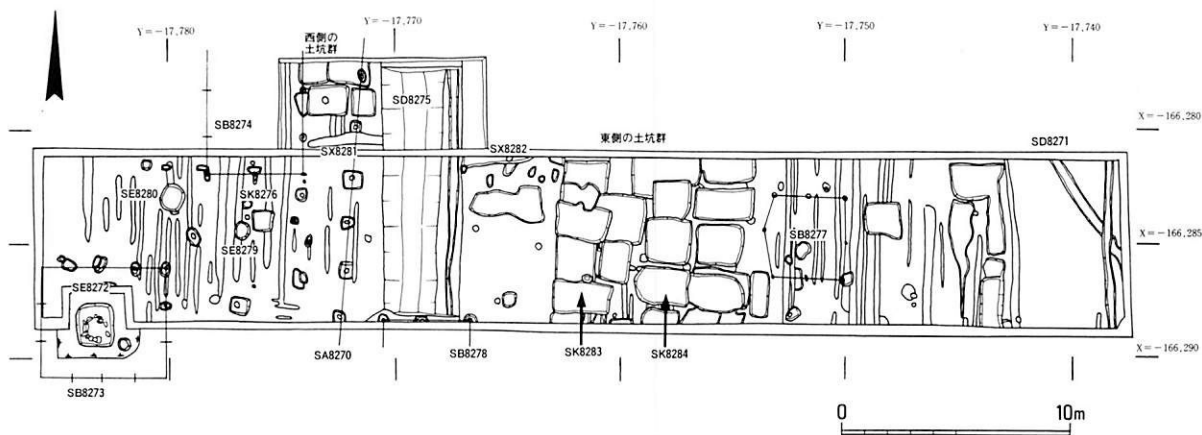
第75-14次調査では、藤原宮期と推定される南北棟建物SB8380の南妻を検出した。梁行2間で、柱間は6尺等間であると思われる。

藤原宮期以外の成果としては、第75-7次調査で中世前期の土豪の居館と考えられている環濠内部の井戸SE8350から、承安4年（1174）の年紀を墨書した曲物が出土し、建設年代の上限を示唆している。その北で行われた第75-12次調査では、12世紀中頃から14世紀までの間に属する掘立柱建物2棟、環濠1条、井戸1基、土坑数基を検出している。このうちのSB8273は石組井戸SE8272を覆う井戸屋形である。これらの施設は、上記の居館と同時に存在した可能性が高く、青・白磁と宋銭なども出土している。このほかにも、古墳時代の斜行溝SD8271や、環濠居館廃絶後の集落墓の可能性のある土坑群も検出している。

（藤田盟児）



藤原宮第75-18次調査遺構図（1：200）



藤原宮第75-12次調査遺構図

2 藤原京の発掘調査

左京七条一・二坊の調査（藤原宮第75次）

本調査は市道飛驒一本之本線建設に先立つ事前調査で、昨年度に実施した第74次調査区の西延長にあたる。調査地は、藤原京左京七条二坊東南坪の西端と西南坪、左京七条一坊東南坪に該当する。調査面積は約2200㎡で、農道や現水路との関係で、東・中央・西の三地区に分けて調査を実施した。

遺構 検出した遺構には、古墳時代～藤原宮期の流路、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物2棟、掘立柱堀1条、井戸1基とそれにとりつく溝2条、藤原宮期の東二坊坊間路、掘立柱建物3棟、井戸3基、中世の居館跡などがある。なお、西区（左京七条一坊東南坪）は、飛鳥川右岸に点在する雷丘・小山・宝泉寺山などに連なる残丘の一つである。調査の結果、古墳～飛鳥時代には現状よりも高く急傾斜をなし、裾に広がる平坦地には掘立柱建物などが建っていたが、藤原宮期に大規模な切土・盛土を行い、残丘を広げてやや高い平坦地を造成したことが判明した。その整地土は、6世紀中頃の須恵器片を含む黄褐土層や、埴輪片を含む有機土層が斜面に沿って縞状に堆積し、かつての残丘上には古墳があった可能性が高い。以下、7世紀の遺構を中心に概述する。

東区西端（左京七条二坊西南坪）で、南東から北西に向かって流れる2条の旧河川を検出した。西流路SD313は、幅8m以上、深さ1m以上で、埋土には遺物をほとんど含まない。東流路SD310は、古墳時代末期～飛鳥時代（SD310A）には幅3～5m、深さ0.6mで、両岸を杭で護岸する。埋土から、飛鳥Ⅰを含むそれ以前の土器類、護岸の堰板に転用した机天板、木鉢、横斧の膝柄などが出土した。藤原宮期のSD310Bは、暗灰粘土が幅8mにわたって広がる。藤原宮期の土器片・瓦・馬の顎骨などが出土した。SD310Bの中央から東北に向けて、杭と堰板で護岸した溝SD312がとりつく。

中央区では、2間×2間の掘立柱建物SB320、井戸SE315とその東西にとりつく溝SD314・317とを検出した。SB320の主軸は、北で約45度西に振れる。SE315の西にとりつくSD317の水口の両側には、花崗岩玉石を立てる。SD317は西へ延び、約20mで北へ曲折して南北溝SD319に連なる。SD319は底に玉石を敷き、両側にも石を立てた石組溝で、幅20cmである。SE315・SD317から飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器が出土した。

西区下層では、4間×2間の掘立柱建物SB360と掘立柱堀SA361とを検出した。SA361は5間で9m、柱間は不等である。SB360・SA361とも、主軸は北で約45度西に振れる。周囲には方位を等しくする溝がいくつかあるが、建物とは直接結びつかない。SB360の柱掘形を覆う焼土塊から、6世紀中頃（TK85）の須恵器高杯片が出土している。

東区で東二坊坊間路SF300の西側溝SD302を検出した。SD302は深さ70～80cm、幅0.9～1.0mで、南でやや狭まる傾向がある。長さ9.3m分を検出し、さらに南北に延びる。溝底には黄灰砂が堆積し、短期間は水が流れたようだ。その上の暗灰粘土層は、流れがよどんだことを思わせる。溝内からは少量の瓦・埴・土器片・木片が出土した。東側溝は存在しなかったが、推定位置近くに掘立柱堀SA301が存在する。SA301は柱間2.0～2.1mで5間分を検出した。SD302とSA301とは、心々で東西約8.5mを測る。SA301の東、藤原京左京七条二坊東南坪内には、井戸SE304がある。

SD302の西、左京七条二坊西南坪内においては、上述したSD310B・SD312以外に、東区で井戸SE305・309、中央区で掘立柱建物SB325を検出した。SE305から完形平瓦を含む瓦片、飛鳥Ⅴの土器、角材・木製匙（杓子）・瓢箪などが出土した。SE309から飛鳥Ⅴの土器、瓦片、籠・斎串などが出土した。

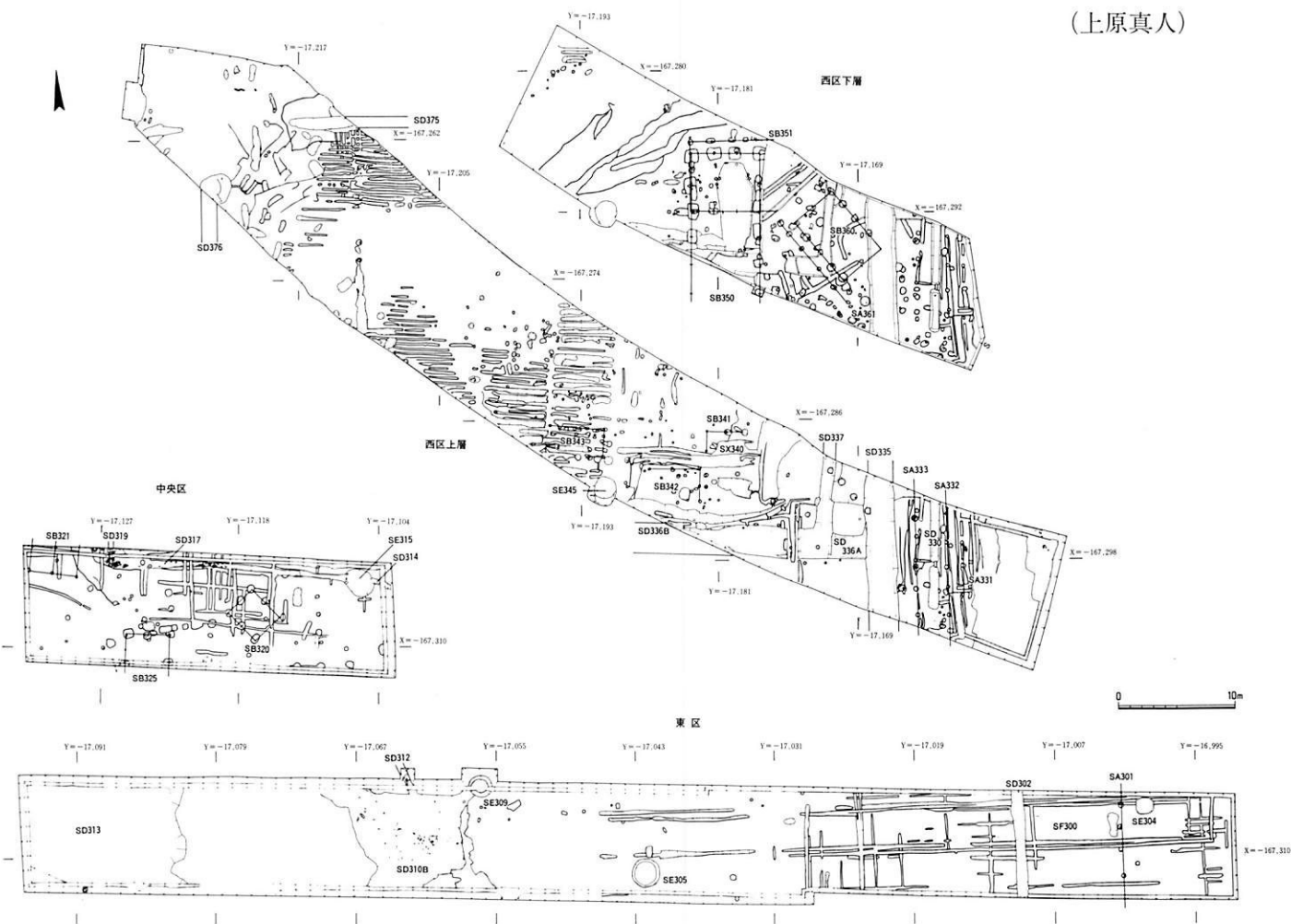
東一坊大路は中央区と西区の間を通るが、農道・水路の関係で調査できなかった。その東の左京七条一坊東南坪内（西区）には、掘立柱建物SB350・351がある。これらはかつて急傾斜だった残丘を切

り崩し造成した東南向きの緩斜面上に建っていた。一辺1m以上の大型柱掘形をもつ掘立柱建物SB350は、3間×5間以上の南北棟で、いくつかの柱掘形は柱筋方向に長い長方形を呈する。SB351はSB350廃絶後の東西棟建物で、3間×3間以上である。柱掘形は一辺40～60cmと小規模である。

まとめ 宮に近接するにもかかわらず、左京七条二坊西南坪では、中央部の溜まり状によんだ流路とそれにとりつく溝、東部の井戸2基、西部の掘立柱建物1棟のほかに、藤原宮期の顕著な遺構は存在しない。坪の中央部は古くからの流路のために低湿地状を呈し、居住に適さなかった可能性もあるが、東部に井戸以外の遺構がないことは、隣接する七条二坊東南坪や七条三坊など、第74次調査区の様相と大きく異なる。また、第74次調査区では瓦片がほとんど出土していないのに、西南坪では井戸の埋土から完形平瓦が出土したのをはじめ、瓦片が比較的多数出土しているのがめだつ。調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にあたる。あるいは、紀寺付属の苑院などが一部北に延びていた可能性も考慮できるだろう。

左京七条一坊東南坪では、藤原宮期に飛鳥川右岸に点在する残丘の一つを切り崩して整地し、造成地に大規模な掘立柱建物を建てる。検出した梁行3間、桁行5間以上の南北棟を、東南坪の脇殿と解するならば、正殿は調査地の北、現在の春日神社南の高まり付近に想定できるかもしれない。東南坪の造成地は、中世に居館として再利用される。その整地土からは、8世紀後半の土器類が比較的多く出土しており、中世居館に先立つ奈良時代にも、この造成地を再利用した可能性もある。中世居館の本体は削平されて残っていないが、方形にめぐる周濠からかなり大規模な施設が想定できる。

(上原真人)



第75次調査遺構図 (1:600)

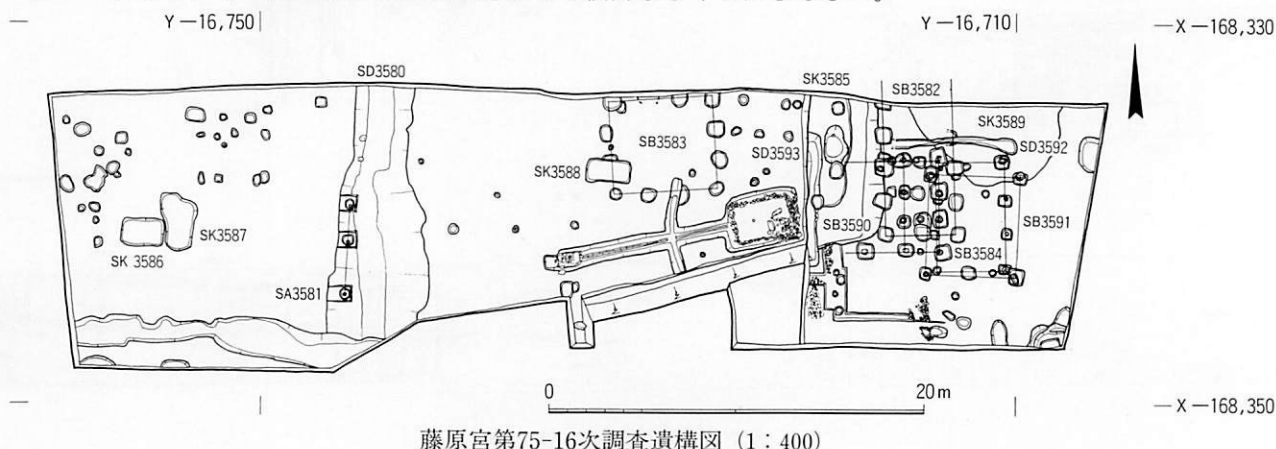
左京十一條三坊の調査（第75-16次 雷丘北方第5次）

雷丘北方遺跡は、これまで4次にわたる調査が行われ、7世紀後半から8世紀後半に大規模な宮殿もしくは官衙遺構が存在したことが明らかになった。これは、正殿の東西南に長大な建物をコ字型に配置し、周囲を掘立柱塼で区画したもので、正殿と南殿の建て替えを境にA・B期に大別されている。今回の調査は、区画塼の東で行われ、区画外の状況を明らかにすることを目的とした。

遺構 西方から続く整地土を調査区の西南隅で検出し、調査区中央部から東にも整地土を確認した。検出遺構は、南北に流れる大きな溝SD3580と、それが埋められた後に作られた掘立柱塼SA3481、その東の5棟の建物群と幾つかの土坑で、切り合いから7世紀に3時期、8世紀以降に2時期の計5時期の変遷が認められた。7世紀前半頃の遺構としては、南北大溝1条と建物3棟、大土坑1基がある。大溝SD3580は幅約4深さ0.65mの素掘りの溝で、建物SB3582は6尺等間で、南北5間以上東西2間の南北棟で、南妻は確認したが北は調査区外に延びて確認できなかった。建物SB3583は桁行梁行とも3間で、南北約16尺東西約18尺と長方形平面をしており、北でやや西に振れる方位をもっている。SB3582の柱穴を壊して大土坑SK3489があり、その埋土に建物SB3584の柱穴が掘られていた。したがって7世紀前半で2時期に分かれる。建物SB3584は柱間約7尺で南北3間東西2間の南北棟である。SB3582とSB3583の間にある大土坑SK3585は、どちらの時期に属するか不明である。つぎに、西方の中心施設A期に対応する7世紀後半頃の遺構は、土坑3基と塼1条と少ない。中心施設建設時の整地土上で土坑SK3586・3587を検出したほか、大溝SD3580の埋土上で塼SA3581を検出した。SA3581は2間分しか検出されず柱間寸法は確定できなかった。このほか土坑SK3588がある。8世紀のB期に対応する遺構としては建物2棟と土坑1基を検出した。建物SB3590は西半が削平されているが、南北3間で柱間5.5尺、東西2間以上で柱間7尺の総柱建物である。柱の根固めに平城宮式軒平瓦6691-Aを用いていた。その西の溝状土坑SK3593もこの建物に関連する可能性がある。建物SB3590を切るSB3591は、南北18尺東西16尺の長方形平面をしており四隅に柱をもつ櫓状の建物かと思われるが、下限は不明である。

遺物 全体に整地土から多量の土器・瓦が出土した。

まとめ これまでの調査で判明した大規模な中心施設は7世紀後半に建設されているが、その東方に前段階の施設があったことが判明した。7世紀前半には少なくとも3棟の建物と南北大溝SD3580とがあり、大溝は建物群の西限をなす可能性がある。またこれが2時期になることも判明した。中心施設が存続したとされる7世紀後半から8世紀にかけては3時期の遺構が検出されたが、遺構密度が希薄で、しかもやや東方に離れた位置に集中している。したがって中心施設と明確な関連性をもつ遺構とはいいがたく、その性格は周辺の調査をまって検討しなくてはならない。



藤原宮第75-16次調査遺構図（1：400）

本薬師寺の調査（1994-1・2次）

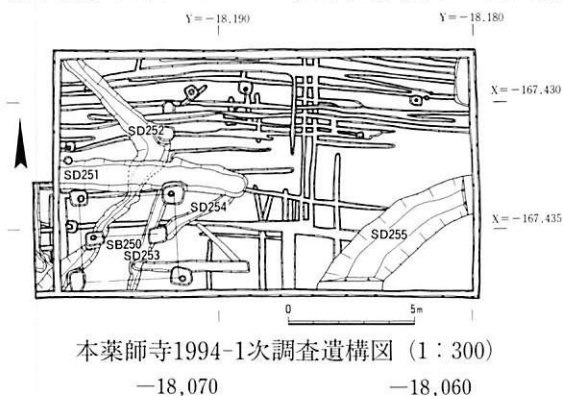
本薬師寺では継続的に学術調査が行われているが、今年度は寺地推定地西北での事前調査と、金堂前庭での学術調査を行った。

1994-1次調査は、住宅新築にともなう事前調査である。藤原宮直前もしくは本薬師寺造営頃の遺構としては、調査区の西半の東西溝SD251がある。溝幅は1m～1.2mで、ほぼ東西方位に沿い、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。宮期の遺構としては、この溝を切る東西1間南北1間の建物SB250がある。柱間寸法は東西12尺、南北11尺と非常に広く、中央の棟通りに8尺間隔で2個の柱穴が並ぶ特異な建物である。

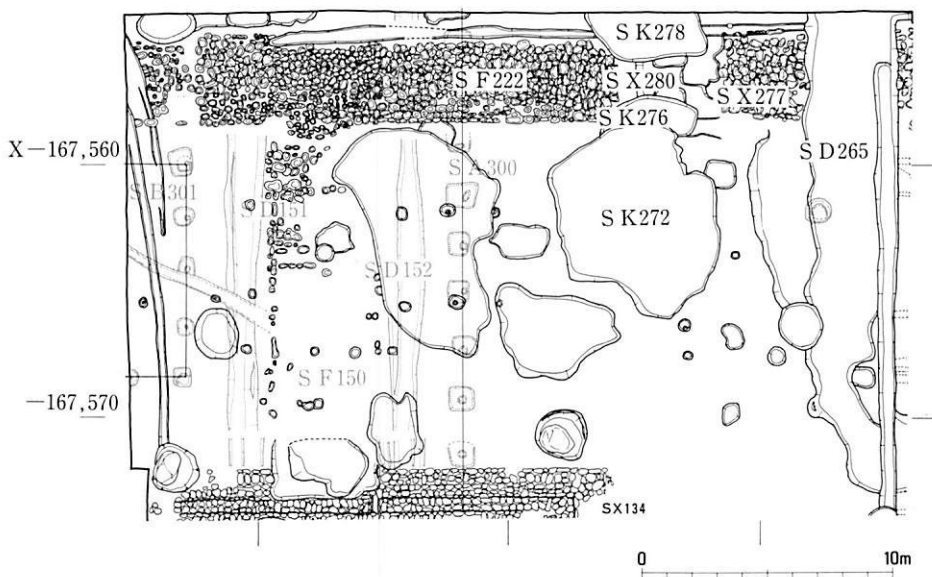
1994-2次調査は、金堂前庭の南半で行った。本薬師寺では前年度までに中門の東部（1992-1次）と東塔の南西部（1993-3次）の調査を行っており、このとき中門と金堂を結ぶ南北石敷参道と東西両塔を結ぶ東西石敷参道のそれぞれの端が確認されている。今年度は、両参道交叉部の調査を行い、合わせて金堂前庭の南東部の全体状況を明らかにすることを目的として行った。

遺構 本薬師寺造営以前の遺構として、西三坊坊間路の東側溝SD152と西側溝SD151を南北参道下で検出した。造営時の整地土で覆われており、幅1～1.2m、深さ45～50cmで、2時期あることを確認した。東側溝SD152の東側7.5尺の位置には南北掘立柱塼SA300がある。柱間7尺で5間分を検出した。西側溝SD151の西には掘立柱建物SB301があり、南北5間で柱間7尺、東西方向は調査区外に出て不明である。南北参道SF150は、そのほとんどにおいて石が抜き取られていたが、東西参道との交叉部南東隅において側石を2個確認し、これにより参道の東限が確定した。推定東西幅は4.5mである。東西参道SF222は石敷の残りが良好で、南側石の一部が残る。北側石抜き取りと合わせると幅は3.4mを測る。南北参道よりもやや大振りな川原石を敷き詰めており、この石の大きさの違いに注目すると、交叉部では南北参道を優先して舗装している。しかし両者を区画する明瞭な側石はないので、

連続して施工されたと思われる。瓦溜りSK276とSK278は東西参道の石敷を壊しており、SK276からは建築部材が2点出土した。この両瓦溜りの下から隅丸方形の掘形をもつ土坑SX277とSX280を検出したが、両方に建築部材を加工して作られた礎板が据えられ旗竿を立てるため



本薬師寺1994-1次調査遺構図（1：300）



本薬師寺1994-2次調査遺構図（1：300）

の施設とみられる。南北大溝SD265は、幅3～5m、深さ40cm以上で参道を壊している。前回調査で検出した東塔南の東西溝SD207と一体で、東塔を囲む濠を形成する。中には10世紀後半から11世紀始めに大量の瓦が捨てられている。このほかに大小4基の瓦溜まりがあるが、そのうち瓦溜りSK272は、10世紀前半頃のものである。

遺物 多量の瓦・土器と数点の金属器が出土した。先行条坊側溝SD151とSD152から出土した土器は飛鳥Ⅳのものであった。土坑SX280から出土した部材は、年輪年代測定から695年±1～2年に伐採されたことが判明し、これと土坑SX277から出土した部材は、ともに断面寸法が幅約6.7寸高さ約8.5寸の通り肘木であった。瓦溜りSK276から出土した部材の1点は床板掛けで、法隆寺伝法堂と同じ形式である。もう1点は、朽損が甚だしく明確には判明しなかった。

まとめ 十文字に交わる石敷の参道を確認し、平城薬師寺では明らかにされていない金堂と東西両塔に囲まれる空閑地の状況を知ることができた。また、寺造営直前の条坊側溝はすでに中門調査時に確認しているが、今回それに伴う塀と建物を検出し、条坊施行時期と寺造営時期の問題に新たな資料を提供した。さらに、東塔の周囲に溝が巡らされる時期があるらしいことが判明した。出土した2点の通り肘木は、創建時の部材と思われる。

(藤田盟児)

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積 (㎡)	備 考	調査要因
5AWG-A	藤原宮 第75次	94.4.4～94.8.8	2,200	左京七条一・二坊	市道建設
5AJL-F	藤原宮 第75-1次	94.4.4～94.4.21	100	宮西面外濠	道路拡幅
5AKG-L・M	藤原宮 第75-2次	94.5.9～94.6.30	360	甘樫丘東麓	駐車場建設
5AMH-D・E・	藤原宮 第75-3次	94.6.14～94.7.13	500	左京十二条三坊	道路拡幅
5BNG-E	藤原宮 第75-4次	94.6.14～94.6.22	16	左京八条四坊	住宅建設
5AH-P・H・	藤原宮 第75-5次	94.6.28～94.7.18	630	宮内	水道管布設替
5AJG-U	藤原宮 第75-6次	94.7.14～94.8.2	84	宮西方官衙地区	団地建替
5AJF-Q	藤原宮 第75-7次	94.7.19～94.8.5	160	宮西方官衙地区	作業小屋建設
5AMC-Q・R	藤原宮 第75-8次	94.8.1～94.8.10	69	左京十一条四・五坊	下水道縦坑
5AJC-P	藤原宮 第75-9次	94.9.14～94.9.22	15	宮内	住宅建替
5AJC-B	藤原宮 第75-10次	94.10.3～94.10.11	50	左京五条三坊	住宅建替
5AJM-C・D	藤原宮 第75-11次	94.10.3～94.11.1	528	右京七条二坊	バイパス建設
5AJE-U	藤原宮 第75-12次	94.10.11～	436	宮西方官衙地区	宅地造成
5AJB	藤原宮 第75-13次	94.11.10～	384	宮内	道路拡張
5AJK-C	藤原宮 第75-14次	95.1.23～95.1.27	70	宮内	歩道拡張
5AWH	藤原宮 第75-15次	94.12.12～95.2.1	300	右京七条一坊	住宅建設
5AMH-J	藤原宮 第75-16次	95.1.9～95.4.8	710	左京十一条三坊	県道新設
5BNG	藤原宮 第75-17次	95.2.13～95.2.15	10	左京八条四坊	住宅建替
5AJG	藤原宮 第75-18次	95.3.7～95.3.27	200	宮西方官衙地区	団地造成
5AJG-S・R	藤原宮 第76次	94.8.1～94.10.5	2,050	宮西方官衙地区	団地造成
5SJL-E	藤原宮 第77次	94.12.1～95.2.6	900	宮西方官衙地区	団地造成
5BMY-L・K	本薬師寺 1994-1	94.9.21～94.10.6	170	右京八条三坊	住宅新築
5BMY-N	本薬師寺 1994-2	95.2.3～	558	右京八条三坊	計画調査
5BYD-A・F	山田寺 第9次	94.11.7～94.12.7	80		計画調査
5AMD-P	山田道 第7次	94.4.18～94.5.24	255		ポケットパーク設置
5AME-P・Q	水落遺跡 第7次	94.8.1～94.12.15	600		調査計画

1994年 飛鳥地域・藤原宮・京跡発掘調査一覧

